

披沙揀金

八

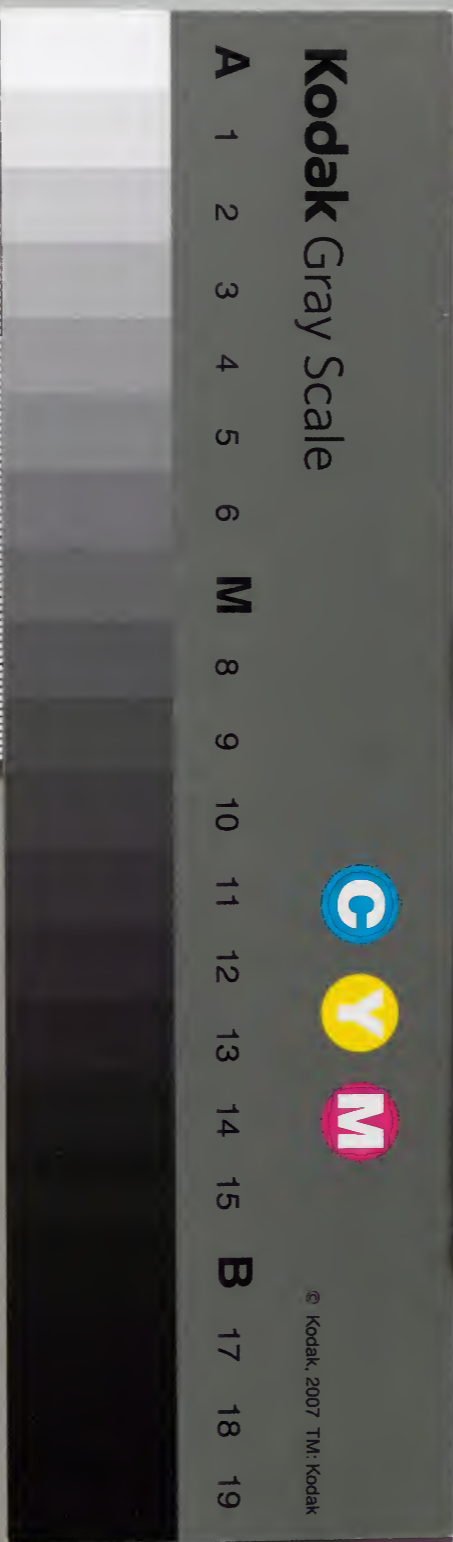
竺

共廿四

庫文閣内	
一五九 函	三三二九 號
四架	三冊
和	

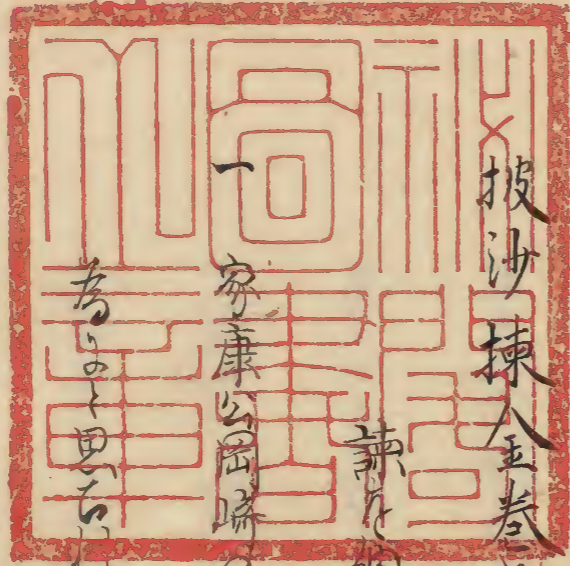


内閣文庫	
番號	和 33169
冊數	34 (8)
函號	159 60



周名抄

披沙揀金卷第八



諫を納せらるる事

一 寄康公臨陣の時城は居座をいりし時勅使がくる時馳走は

考より思ふに長三尺程の鯉二枚活須の中へ放し之を煎焼

度よ鈴木久三郎件の鯉は門一本取よさせ居臺所まで料理し付

其上織田信長より糸より南都端白一樽を切らせて吞こし

人々も振舞ふ付きて鯉も酒も拜願いしこの後あるべし諸人

存るも後して後時活須を伊覽おさる時三本の鯉二枚ありて

見えと池須顔の坊主を以て伊尋かきく御子玲木久二郎
に付て取よさせ別料理よいくし其身も給り人くも振廻し
りよとこハ以の外ハ腹之を遊り巷不方へも伊吟味を遂り弥
其通るれハ大い御機嫌損へ伊自られり討よ可き遊と仰
付ゆ長刀其鞘をさつてせ流り廣縁を以て之玲木を以て
久二郎も致覚悟ありもひるこころ亂るもあくる畏れとて由路次
によう飛出る其間三十間計も有るに

家康云玲木名屋者の成敗もろそと此詞を掛させらるまは
久二郎に己う刀脇指を授ふ二間も跡へからりと授け丈の眼り
角を之に押しつけ抑魚鳥は人間をわかれと云事あるものさし也
九振の伊忍よて天下の望に満ちくく我昔の依りあり度松に
て三蔵と云て大肌脱を成て伊傍へ迎おすよ

家康云伊長刀を捨てせ流し最早ありきとて仰られしを儘
伊座敷へ入せらるし則久二郎を以て出共方忠節活き公入の祝
感入満足ありて先日登壇より多かる取城の場より細く
あ人の歩みは若とも近日曲事より一と忠押替くそ

くろくたふまふ人たふ只今救免とふと仰らまはれは久の節
泪を流し私癖の寸志をも如此所取ま遊作は遊以有難
候は所度中偏は天下を志ろく古くは手は瑞想とま存

中よる也 岩淵夜 祐別集

一 権現様の腫物に類を成し膿をさき取ると蛤貝を以て患部
せし成し痛強治中外科を以て付薬を遊せしは痛石止
おま他は治り多し長閑と唐人醫者の薬を以て成し松
よ中よる也 其薬を以て成しはしむるべき薬を以て痛

坊格に世見を成るは付る成との成り他は治り又長閑
の薬を以て治覽を成しは治り痛止し中よる也 中よる也
又は付させ成し長閑薬を付其よる灸を仕る方と腫物
内より張切し痛止則他は治りをさき取其方ありは命を
助け其方ふゆり人ばさしは治り大切に存心
よさし中よる也 其方ありは治り 紀伊國 物治
一 源君の背に癰發を蛤の貝を以て挟みて血を流し出すせ
しむるよる也 是方ありは治り大に腫痛を療治驗あり時に

明醫よよるけり諸君是よ見せんよせとも我れ死よとも何
そ異域の醫よ逢んやとて思承引るよ本多作兵衛重次
の曰く殿今片を棄させよとや

源君の曰何の言よ重次殿も此癰愈する時片は瞎目跛足
誰う片の如き者よ懸命の地を興へしんやとて活政を食を
とつよいふ忍よとて只自害を致さんので殿は覽せしれとや
武田亡し甲信のまをた出されしよは武功技群るも皆片等
うま産よ親し片等も敬も殿片等を懸ませしぬり明醫を

思ませしるんま理かよとせし

源若湯承引わつて夜うく愈しう景勝家志りの士

源若癰を病く不可愈し聞し信玄謙信あ大將軍して後ら

獨り

家康のよ武將の器量けり此人よ入るく天下の弓矢は癰れ
んとて勢きあり

源若傳聞あまして謙信は信玄の死を惜めり其遺風今り

まろと深く感よまろとく
話 碎玉

一 天正十二年二月濱松の陣城より

家康も亦せかくも根太のやうなる腫物出たりと佐原作十郎
前爲長七郎河野甚き席より二人の見小性五へ此根々の根
を押しと仰付何も強く押し集むはね危や角と云ふも
うへへおんし男子のやうもあましく出たりし蛤貝の口より
とて引わけと仰付若年の面々の考とあり仰の旨
任せ共めく致せし白き芥の根料如くある者二三寸拔出
一箇の割やせし是より能く仰らるる程は腫物候に

とれより腫強くなり腫物を痛ませこれ散くの時きり
と爲成湯家中に我陣城に相送る汗を拭くは醫師元も
さぬ療治をやりよるものとも治年より腫物の根をぬく成
せし後より腫物のいりよりこの輕くさりりらもあましく
仰意は付し藥を付よてやうもあ

家康との由もあましくは成らるるはとらるるや家光申
はははあは遺言を遊程の儀されし遊國より既に他界
と御法仕るるは抱ふはあましく御先年我

植物を療治は勝屋長閑薬を伊付さしはむとパーゴ
いゝも一圓は同心を遊とくく作は其の腹をさくく
殿いむいゝも療治をめしはむと大死をさるる事編は心
更といやかゝる遊に惜き伊命さくまゝに最早十の九
伊中渡は方すきと醫者も中ゆ十も万も入るべき作
在安は伊先へ可系系あゆはも伊跡へさくこの伊供を成
る者間をくく伊先へ系ゆ今世の由腹をい口今パーよ
とく泪を流し伊花を狂えを

家康の自覚者として伊傍丸よはむと止くは仰さく其方の家
の違ゆる我等病礼重きとくも未果もやと縦に相果ゆとくも
師の事こそ控以た事さし其方るる取分息災とく四百
かゝる若手者たむ心を付ゆあうよ一校くは存物の腹りも
まら先腹近腹を切るとそのや不有と最後遊長時他世の
パーいよとくは殿の由中るさしは事さくゆは人も人よ信ては
るては我等もも今年のかも二十も若くゆり殿のさくか
云分別ある人の由供致すといはむそのさくゆはも其後苗年

八十より若い若き時より此の陣此陣の山岳を仕行目七切
はふたれ等の揃ふも切をいふはあてりし威の二廿の人は
かゝわらふかゝいふをまた一人してわけしはよの常人前
の事なる事としてあつても今日まで敵の情計をいふ家
申さるゝ人々あつて存すも只今も敵の四死をまじき人に
あつて他人をくもさくは極者の氏直敵を始山持の國をね
らひに事ゆは必也所家中の諸人今も敵の敵をくは
力の存るはけいよとありき今我は仕行るはよとありし
こと

をけりし甲より外にきくは其時より我等存命ゆはいふ
こと
家康のけりしはゆは多也いふと者も何を樂に命を
惜に存命ゆはゆは後指をさしては生くる甲變もさくは
此頃より武田敵家中より實利敵と諸人の言致よ是て
侍も主人の運るはけい今福田富家へは糸は多平八の組
成松平一黨白坂一黨の者もけり下座を魚つらひに居るは
常に見ても事家くは是人のよとい存るはゆは通理を

口祝きて涙を流す其時

家康を仰り其方平いふも丸の上は療治の效もかく

も其方の任せらよと仰らまはし則長閑に生じ山薬を付系

らせ山分をい双心の筒入大さよして他金身自身さよして進上

仕う丸の薬をい上は早速に療治廻り其あま汁は山腫

物切切影を山腫血流れ出る他金身をよとて行はまかく

山腫物やうの中念あり

岩洲夜
話別集

一 天正十二年二月

神君應を頼りせままふ中多化金の重次糟屋政則入道

長閑より一醫を吹擧して療治し山腫物の中徳あり或云

紙後よなるい上杉景勝

神君山腫物平念の中をい

徳川家い希代の良徳あり天正うらよ年を慨さんと欲

まらる由を称す此事

神君の高聞よまはし殊に感慨しあまふいよ

征州根菜
由緒書

一 家康を駿河より度り時大事なる有るに依り中多化徳あり

一 仰付の重く火事出の者切腹す仰付の者其旨一
相觸の上意也 佐渡の中尤く退出と望朝登城と
一 昨日仰付の事と後述の事と上意あり佐渡の中謹て
只案は此儀も先と存する細い若重て井伊之助の
如きの者招火事出のり決して切腹は難被仰付のり
先は由旗中の小身成者も仰付難成者も仰付の時
は法度ある直うして難之故に此後昨日の事と上意存のり
とて仰付の儀其の上意分別仕へり上と存存今所明とす
と

うねりゆき多ゆい殊外中感心なり此事止ありとあり

兵用
拾話

一 慶長四年諸大名石田治教が輔を教人の入事ありされり
治教の輔に申あり元多事あり
神君（其辰）に申此のいふと存と思ふに不意佐渡の中
と治教の輔は回報に成り事申之用も存り其あり今治教
が輔若りの付天下の者治教を為し取例一度も存り
治教を例に成りけし次

仰希板を人のまうよ可存ある其まの由を成ゆへに
るをいふ仰のりつひに入る成治初に諸人ともまわうに
中なる先澤山へ逼塞をわたりて我とい仰日其所治初澤山
へ引おる

神若治初へ中へも心成よりけり云由中より成結中
納言度人質の心して治初を身へいふを治初澤山の通不
中納言度人由同通へもまわも是より山帰て成ゆ今度
中芳志亦も存ゆといふを合せ古光の願へを遂上り

中納言度及まより山帰へ成ゆ
永月記

一 家康もむ多佐渡おる進はけ治りて山治初を浦と志海
まわくしつものあり山治初果へまわくしつ仰けに
佐渡おるけいまよりいふ其まもまをせらるるいふや
あるもの仕業もて天中いなのつらぬまよ入ゆへにせ
とありうく志生を考へらるる人なりとせ
備前老
人物語

一 権現村駿府の山居を遊ゆ其由奥方の若手へ申おる集り
居る所の津慶坊母といふまのいふまはまわくしつ

のつきまふうもい成るやゆと

仰希杯もい聞る言遊分よと也唐を成るうう能也唐ゆと

アよよの侍慶ア分よ有るうゆとゆと
駿河 土産

一 家康と駿府の内城の西唐をもれらる以所書所請事の後
をア付る彼人へ常見と申仁有る或時其方より女中元
あ合てり物言ようやうよ何とも極幸くして迷惑なる事と
ありし頃の月日よ公儘の事とありしはよるいふ物を喰
事の内いんやとよやまありけりた

家康と物言の聞る所の女中をいれ只今各のア付るは事
とと由尋者よといわ別の事とては唐屋ゆ所甚所より出
ア付我らふの下のれもの事とてゆとア付るまといわ何やうの
そと重て由尋はうらまといし誰といアよ兼て居るうよ付
いよと由尋者よ其附年ある女中アよとれらるい頃日の事
よても唐屋ゆ所より出るゆむいわうこかと殊外極幸く
也唐ゆを面いぬく年寄も物もわいしうきやうよいまも坊
てやぶるきく九に一口もえいア付るぬぬくよ唐屋ゆ所私方より

伊駒の常見より度々断をPをゆへも聞分も亦座外との
事を只今由次より常見の情の燈よりよとして何れ笑ひとP上
らるるに

家康の聞らるるにいと何れも夜迷惑も理りあうけ後いさや
よまきやうもいさよせんも仰らるる(由事)と為成常見を
して仰らるるにさるるをP付る味噌香物かと控へて
奥方の女も殊外迷惑仕ゆよゆる向後さやうよまきやうに
P付らるるよまきの敏常見謹してうけ流りの服指を指し例

迎へる由耳よはか押あつらるる人暫くさやまきP上る
家康もも笑はるるれあういさよまき流り兎角の仰もあ
常見の所帯を存せり所帯伺との元何事をP上るるよま
各推量よ及いさよ松とて或人常見よ其松を尋るよ常見
答へ云別の事かも非と女中いあして大分のをいさたう
Pは只今まきのをよまき幸く仕ゆて大分の味噌香物と
わされいよまきのゆへ増加減をよまきいさよまきいさ
不Pも雜針ゆさるるよまきいさ年中よまきの由事座と存感

同句後より中の方より内よりして上より降す所なること必
山嵐入遊々れりゆのゆり言用よるるれりやうよと上よりなる也
と常見流るるともあり今駿府の由城中之常見藏と申す所あり
と件の常見預りの藏の名ともはるる

岩淵成
語別集

一 東照宮瀨松よありませしあるおち多正信也前より
しは誰人より有らん 姓名を
記す 懐より一封の書を取り出し練の書
へ手のかねしより存する事ゆり書ゆりのありとせし大り
悦びあましむれ讀めと仰ありはまに披て讀るるよ一條讀

終る度こころをけしむしむありと仰られ讀終り
はまに汝の志感とるは詞あり是よりも心を並くしむ
者よりいふも神妙ありと經返り仰るまに辱きかき
退由と正信居強て只今練せし事用ひは事よらに
とせし

東照宮大は伊乳色かきせ流しいやよとこころに知るる
まするおちより上國を願一人を治るまよに過らる者あり
せ練る者に舞くして只誦くま君のいし事道よ違へしは

作らざると詞たうしき人ハなきやうし諫を拒き一人の國を
失ひまた亡く後世の笑ふ事とありしやう多し只今
我を諫し者日ひ心を盡し見及ぶ事多し付諫んとせし
し書きたるし時たひらに見せんとせし居らうし忠は譬ん
やもするし用よしと用よしとあまよしとあまありし彼
忠心を盡きたるありしと仰らる又東夷の乱治は元皇君
治るもの志軍は先驅きたるより大の論もさし其政は
結し一番は進出のいもあまの事を捨てる事なれしと必

しと討死せし又討れしうも後の世は名を強し死後
譽とありし幸は功名を遂げ恩賞より家富子孫榮る
ありしが得あつて失ふ事忠あり諫はしし主君は道
とて吾を為むし進出の直言きたる者十は九に刑辱を
妻も子も滅し果るやうは成りしう失らうし得る事忠
武功は名利の爲も成し諫言は聊て其の爲をわし心
のいひし主君の命より直言きたるは只人は君する者の業

忠言は諫はありしと仰あつる
常山 紀談

一 権現様の此時准中ん存分書付し一封信内前へ持系尾
 之内、Pより手紙も書付Pの内覧を待て下りり
 Pの内分を格けてさるい某を棟P毎よりやさしいいあ今
 さまとて其方流りしと仰り其人封を切て流Pの箇條
 書もしPの内何の事と申必一箇條こしよ内をくされ
 けしをあるものと感成り流平と申特なりと分と思ふ
 其書付は方しと仰り此礼を成り其節申多流渡書及
 傳りさるPの内何の人さるしとて流渡書への存り
 と仰りし何の者よ相尋ふ直座中一川も用はさP後い
 其中の其時仰りしやとてさるしとてさるしとてさる
 及而い主是非ゆしと多筆は方ありと存りて
 よ心を付しは方しとてさるしとてさるしとてさるし
 其叶候しはまたさるしとて何の用もさるしとてさる
 まし、儀とてゆしと仰り流渡書及其後上野分度へ持
 系Pよりし
 大印不様の下れさるしとて成りし中しは方思ふなりとの

及ぶ場不としてさういふ格別の思ひはなしとて感嘆すべし
話

一 駿府の印城のこと

家康公の世の立上り意有るは凡主人の悪事あるて見て
神を容る家光に戦場より一番勝を突くはありては
増する公にせむはつとてあつて細い敵は白く武をたせむも
身命をかたしてはるる事あり然も勝負の時の運次第
され人をも討人も討るものあり然討死を遂げても未代
まで譽れの名を残し主人も情たれられ死てお辱め不

なり人は公好く人を討時と武名者の名をとり主人の感
悦は欲り其上恩賞を得て家も富子孫繁昌の事ありて
あもむるものそれ戦場の持て死ては生ても損の事積り
なりとて又主人の悪逆不道あるを悔いて強く諫言を
いひてとて十の九はあつても何れも勝負あり細い其主
人悪事を好む公つて悪事を悔ひて古人の良薬
は苦く金言耳は遠くはとて是れくは主の悪事あるを見の
しとて是れ異見なり云家光をい常は隔公をい傍へ出付

ともかいはうて内書付を調懐子納きて時席を見念我
等に見せんと物ハ志に何なるも人雅一其事用するあては
とう用はまねにねらうことこそいふこと也
過にきりぬるのあつれきもいふ事ある者ハ公易キ友達傍
學友もいふ事あるのあつれきもいふ事あることハ吟味穿
鑿を遂ぐるもいふ事ある人よといふこと改嗜し事多
くのあつれきハ心身の徳をうさぐ又大身に何れも權をさす
こと友達朋友ハ申合し公易く信るべきやうな事なればいふ

善悪を吟味するもいふ事あることハ日東報書のおえ依りハ
此を本ともいふことあるれば大子の事なればかともいふこと
いふことある信てあつれきの徳ハ信ることも思ふこと思ふに
改めんと云ふも信ていふ事多きことあるは是に必竟
大身の損ともいふこと九人の上なきこと下の徳を聞するもの
國を失ひ家を破するに古今たまたまといふ仰らる佐渡も
うけしめりて覺悟す或附るも上野ハ信る事の中せり信
は及べ上野ハ其書付にわらうの文をいふ中産ゆと其人

誰ぞて作れよ多し佐渡とて其書付の文言も其まじ
其三方聞て何の用よき事とてもあしと申されたるも

岩淵夜
話別集

一 東照権現宮開原印發向の道より旅宿をえこまてい
ある人々と尋させこま入る津古宗の所化ありとありは
別口には通く百ほど合戦の吉凶をよせ給ひあるは
負きを給ふへその故に敵を偏は搦く伊氣をたし
させ給ひありては勝利ありとて答へ重信を問せ

けるいん勝利をいひては傍にいそく印公いんよ天を
治平の万民を安泰ありと神社佛閣の廢頓を興隆
せんといく大悲の證をよせ給一人を封て佛歌神歌
をこそ降伏せしとあほりいりいりいりいりいり
やされまこと大いしや所感方てまよひよはは後道理よあ
けりいんせよと開原を誘引しとぬい自他を戦死
そのを過去帳に載せよせいみりり吊しぬいり後
三洲大樹寺より降古印口五重血脈等のいりり受得

ふむい称名三万遍の目課戦場よくも尚おこころくふハ
より〜と〜やりの傍ら後よ観智國師〜マセ〜
新著
聞集

一 大坂陣のとき大和のうら〜うの侍を出陣と成ゆと
何れもやゆい古う〜く〜の侍を御し合戦は勝〜る事
か〜物〜いふ古お例〜と各やゆ度〜く〜の侍の
き〜ま〜出押傍よ〜せ道を出押通〜る〜成ゆ〜る
諸士
軍談

